

エコトランクで楽しく遊ぶ！学ぶ！

赤阪幸司・芦田博貴・遠藤健彦・大島達也・神谷亜依・高島基郎・田中洋次・
南部恭宏・藤長裕平（兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科）

■エコトランクってなあに？

エコトランクとは、環境学習に用いる教材を箱の中に詰め込んでキット化したもので、公園や博物館などでよく見かける。箱の中には臭いや手触りなどの五感を刺激する教材や絵本、虫メガネの付いた捕虫ケースなど、こども達の興味を引くように楽しくデザインされた教材（おもちゃ）が入っている。キット化されているので、幼稚園や保育所、小学校などに貸し出すことも可能だ。今回、僕らは9つのエコトランクを企画・制作、保育所での実践などで感じたことを報告したい。

■制作したエコトランク

1. カードやスゴロク、パズルなどは小さい頃に誰もがそれで遊んだことのある玩具で、今のこども達もそれは変わらない。だから僕らはそれらのツールを、身の回りの自然環境にこども達が目を向ける（見直す）きっかけとして使ってみようと思う。保育所の園庭にある植物を探し当てるカードゲーム、こども達の生活圏にある資源をネタにしたスゴロク、生き物とその生息環境との対応を読み取るパズル。そんなものが箱の中に入っていて、遊んでいるうちに当たり前だった風景がちょっと違って見えたりしてくれることを期待している。

2. あまりにも身近でない大きな環境問題を相手にすると、自然嫌いのこどもになるという指摘がある。だから僕らは身近で手触り感のある環境の中で、五感を駆使して体験的に遊び、学ぶことが大事だと考える。ある箱には目隠しをして木肌に触れるアイマスク、臭いを当てる装置などを入れた。またある箱には五徳、フライパン、網カゴに加え、落ち葉やドングリを入れた。スタジイなどの実を煎って食べるのだ。そんな楽しい五感体験が箱の中に詰まっている。

3. みんなで協力してものを創ることで、こども達の社会性や創造性を引きだすことも僕らは大事だと考えている。具体的には、ある箱にはコテや防水シート、杭が入っていて、砂場で川づくりを通じて川の仕組みを体験的に学べるようになっている。また別の箱には、枯れ木や水ごけ、土ポットなどが入っていて、これらを用いて日本の童謡に出てくる里の風景模型をつくることことができる。日本の童謡や唱歌には、ふるさと、夕焼け小焼け、春の小川など、里の風景を歌った歌が多いが、こども達はその風景や意味を知らず、模型をつくることで里の風景をみんなで共有したいと思う。さらに別の箱には、竹やビニル紐、ノコギリやハサミが入っていて、音が鳴るおもちゃなどをつくることことができるが、これを同年代のこども達で作るのではなく、低学年の幼児と一緒にすることで、異年齢児の交流を促進する一助にしたいと考えている。

4. 園庭や校庭で環境教育や環境学習を展開しようとする、生き物をいかにそこへ誘導するかが重要になると思うし、そのための仕掛けについても留意しなくてはいけないだろう。例えば野鳥を園庭によぶのに、今回はバードフィーダーを設置、観察用のコイルや子ども用テントを装備した。これらのツールを通じてより身近な生き物と親しむ機会を提供したい。

■保育所での実践

1月12日に淡路市立浦保育所で実際に幼児を対象に実践してみた。その報告はパネルで紹介したいと思うが、環境教育や環境学習を展開する上で「何をするか」という中身の議論が最も大事だと思うが、同時に「どう伝えるか」ということも非常に大事なことだと思う。小さいことかもしれないけれど、こども達になんの工夫もなく虫メガネを渡すのと、宝箱のカタチをした箱のなかから虫メガネを渡すのとでは、わくわく感が大きく違ってくるだろう。それは結果的にこども達の自然に対する興味関心の深さに繋がってくると思う。僕らはこういった演出にも配慮できる環境学習のプレイヤーでありたいと思う。



(参考) ドイツで使われているエコトランク